

〔連載〕『凛々たる人生』

— 志を貫いた先人の姿 —

〔第十七回〕日用雑器を民藝に変貌させた 柳宗悦

東京大学名誉教授 月尾嘉男

大正浪漫と民藝運動

二五〇年近い鎖国を維持してきた江戸時代も末期になると、黒船と名付けられた欧米諸国の汽船が到来し、日本に開国を要求するようになる。その結果、開国してみると彼我の

巨大な格差が明瞭になり、文明開化、脱亜入欧などの言葉が象徴するように、日本の官民は先行する西欧を必死に追跡した。それを象徴するのは法律、科学、技術、芸術など広範な分野について、先進諸国から多数の学者や技師を高給で招聘したことである。

この御雇外国人と総称される人々の延数は

明治時代初期の二〇年間で政府雇用が約六二

〇〇人、民間雇用が約一万二五〇〇人であり、

科学や技術だけではなく、政治や行政の分野も幅広く対象とした。それらの人々の給与も

一部は大臣を上回る高給であり、出遅れた日本の危機意識を明瞭に反映していた。この戦略は上手く機能し、日清戦争や日露戦争の勝利が象徴するように、短期で日本を強力な国家に改造することに成功した。

する民藝運動である。

雑誌『白樺』の創刊

この民藝運動を推進した中心の一人が柳宗悦である。父親は武士階級出身で一八七〇（明治三）年から海軍に奉職して海軍少将にまで昇進した柳栖悦であり、その三男として一八八九（明治二二）年に東京で誕生した宗悦は学習院初等科に入学、さらに中等科に進学するが、そこで作家として有名になる武者小路実篤や志賀直哉と交友関係ができて芸術分野に関係するようになる。さらに高等科に進学して優秀な成績で卒業した。

芸術分野も同様の傾向であり、一八八七（明治二〇）年に国立の東京美術学校と東京音楽学校が創設され、外国から教師を招聘し、邦画や邦楽よりも洋画や洋楽を中心とした教育をしてきたが、一九一〇年代になって年号も明治から大正になると、その熱気から冷静になり、日本の伝統文化や独自技術を見直す「大正浪漫」という風潮が登場してきた。その代表が全国各地に根差す日本独自の芸術を再興

その中等科に在学していた一九一〇（明治四三）年に、武者小路や志賀とともに同人雑誌『白樺』の創刊（図一）に関係するが、そこに「近世における基督教神学の特徴」とい



図1 雑誌『白樺』創刊号 (1910)

う論文を投稿し、それを契機に宗教や神学に関心をもつようになり、東京帝国大学文科大学に進学した。しかし、次第に宗教を研究することを疑問とするようになって科学を対象とすることに転換し、翌年には『科学と人生』という最初の著作を出版している。

宗悦は『白樺』の創刊に関係した仲間とともに近代彫刻の父とされるオーギュスト・ロダン(図2)に傾倒し、『白樺』で「ロダン第七十回誕生記念号」発刊、そこに「宗教家

年からは東洋大学教授に就任、さらに二二(大正一〇)年からは明治大学予科でも講義するようになっていたが、二三(大正一二)年の関東震災の翌年に京都に転居した。

魅了された民衆の工藝

京都に移転する以前の一九二四(大正一三)年一月、宗悦は友人の故郷の山梨を訪問し荒々しい手彫りの仏像に出会った。作者は山梨出身で江戸後期に全国を行脚し、各地で仏像を制作した木喰上人(二七一八―二八一〇)という行者である。全国に七〇〇体以上が現存しているが、円空の仏像とも相通ずるノミの痕跡も明瞭な木像(図3)であり、これに魅了された宗悦たちは全国を行脚し、三年で三五〇体の木喰の仏像を発見した。

四月に一家で移転した京都でも将来の活動

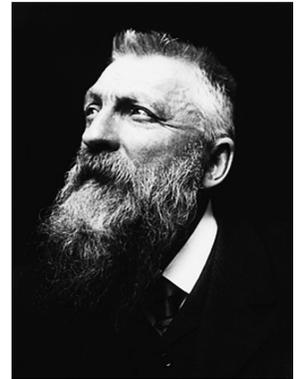


図2 A・ロダン (1840-1917)

代の浮世絵三〇点をロダンに送付したところ、感激したロダンから直筆の礼状とともに三点の彫刻作品「ロダン夫人胸像」「ある小さな影」「巴里ゴロツキの首」が贈呈されるという異例の展開となった。

一九一三(大正二)年に大学を卒業し、翌年に以前から交際していた中島兼子と結婚して親戚が生活していた千葉県我孫子に転居したところ、『白樺』の仲間の武者小路や志賀も移住してくるようになり、一種の芸術集団が形成されることになった。一九(大正八)



図3 木喰上人による仏像

の契機となる出会いがあった。一般の人々が自身で生産した野菜や自身で制作した

た竹籠などの雑貨を神社の沿道で販売する朝市が近所で開催され、物珍しさから何度も見物に出掛けた宗悦は丹波地方の農家の女性が自身で織りあげた「丹波」と名付けられた素朴な布地に魅了されて購入し、また不要になつて朝市で安価で販売されている陶器や雑器も数多く購入して蓄積していった。

この活動に共鳴したのが陶芸作家の河井寛次郎と濱田庄司であり、三人は全国の木喰

仏像を調査するとともに、その精神と相通ずる各地にある日常生活で使用されている雑器に魅了されるようになる。そのような雑器を発見するために三人が紀州を旅行しているときに議論し、西欧の民衆社会に根付く「フォークソング」「フォークダンス」から「フォークアート」を連想、民衆の工藝を短縮して「民藝」と名付けたのである。

これは従来の貴族社会や上流社会から誕生した芸術ではなく、庶民生活で日常使用される生活用品を評価しようという意図であり、これを社会に広範に浸透させるため、一九二六年に前出の三人以外に陶芸作家の富本憲吉が参加して「日本民藝美術館設立趣意書」を発表した。さらに一般にも浸透させるため、東京銀座の鳩居堂で「日本民藝品展覧会」を開催し、「民藝」という言葉が正式に社会に発表されることになった。



図4 朝鮮民族美術館 (1924)

藝作品を常設展示する構想も浮上したが実現しなかった。そこで次第に自力で展示施設を建設する方向に転進し、その一歩として三一

(昭和六)年

には雑誌『工藝』を創刊、三四(昭和九)年には活動母体となる日本民藝協会を設立した。そこに登場したのが大原孫三郎である。大原は江戸時代から岡山県倉敷村一帯の地主で庄屋でもある名家の子孫で、一九〇六(明治三九)年に一家が経営していた倉敷紡績の社員寮内で感染症が蔓延して何名かの社員が死

日本民藝協会の創設

それ以前に、宗悦が民藝に関心を集中するようになった契機がある。一九一四(大正三三)年に陶磁器研究家の浅川伯教(のりたか)がロダンから宗悦に贈呈された彫刻を見学に来訪したとき、当時はそれほど高価ではなかった朝鮮の季朝の磁器を御礼に持参したことがある。それが契機となって宗悦は一九二一(大正一〇)年に雑誌『白樺』に「朝鮮民族博物館設立計画」を発表し、三年後にソウルに「朝鮮民族美術館」が設立され、その体験が民藝美術館の設立に発展していったのである(図4)。

そして一九一七(大正六)年に『白樺』に「白樺美術館設立趣意書」を発表するが、関東地震により頓挫する。二九(昭和四)年には東京帝室博物館(現在の東京国立博物館)の館内に民

亡する事件が発生し、社長であった父親の孝四郎が辞任したため後継となった。就任直後から社員の労働環境の改善、福利厚生の充実、工員住宅の建設など、当時としては異例の社員を厚遇する経営を実施した名経営者である。それ以後も一九一四(大正三)年には大原奨農会農業研究所、二一(大正一〇)年には倉敷労働科学研究所、二三(大正一二)年には倉敷中央病院などを設立していくが、三〇(昭和五)年に大原美術館を開設した(図5)。

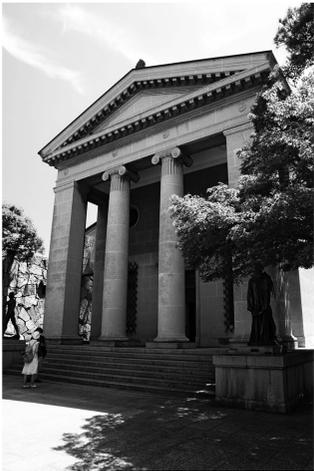


図5 大原美術館

そこには画家の児島虎次郎を西欧に派遣して購入させた当時の大家の傑作が展示された。モネの「睡蓮」、ゴーギャンの「かくわしき大地」などとともに、エル・グレコの傑作「受胎告知」など現在では入手できない傑作が収集されている。

一〇〇年目にして見直される民藝

この大原から一〇万円の経済支援もあり、一九三六（昭和一一）年に東京都目黒区駒場の閑静な地域にある自邸に隣接する敷地に開館したのが「日本民藝館」で、宗悦が初代館長に就任した（図6）。ここには宗悦や仲間が全国各地で収集してきた雑器とともに、前述の浅川伯教が収集してきた朝鮮の焼物も展示されているが、開館記念では仲間の濱田、河井、富本、芹沢などの作品を展示した「現

図6 日本民藝館



代作家工藝品展覧会」が開催された。

この展示の特徴は歴史に記録されているような由緒ある名品や有名作家が制作した高価な作品ではなく、一般の家庭の日常生活で使用されている雑器であり、宗悦が雑誌『工藝』に発表した文章を要約すると「実用を目的とした容器は健康で平穏な性質で罪深い作品はない。一方、名品には作家が自分の名前を顕示する気配や風雅を指す意識が色濃く反映しており、健康な品物は例外である」ということになる。

そのような精神を反映し、宗悦は日本民藝館内に展示する容器について、自分の収入の範囲で自分の趣味に合致する雑器を購入して家庭で使用し、しばらくしてから民藝館内で展示し、また家庭に回収すると説明している。

実際に宗悦の三男が、家庭で使用している煮物の容器が見当たらないと、それが民藝館内に展示されており、しばらくすると家庭に戻っていることが多々あったと回顧している。民藝と名付けた理念を実践していたのである。

宗悦は自身の家庭や財産についても独特の哲学を実践している。還暦になった時点で家屋とともに所蔵していた大量の陶器や蔵書などすべてを日本民藝協会に寄付した。そして三人の子供に財産はすべて寄付したから遺産はないと伝達したという逸話がある。実際には弟子たちには陶器や書物を気前よく贈呈していたが、子供たちには何物も贈与しなかった。

自分の進路は自分で開拓しろという教育を見事に実践した人物である。

二〇二一年秋に東京国立近代美術館で「民藝の一〇〇年」という企画展示、さらに昨年春に世田谷美術館で「民藝M I N G E I・美は暮らしのなかにある」が開催され、民藝が話題になった。一般に芸術は高尚なもの、一部の関心ある人々のものという印象があるが、普通の人々の生活に浸透している活動や作品を芸術の視点から評価した民藝には芸術の範囲を拡大した功績がある。現代は開拓した宗悦たちの見識を評価する絶好の時期である。

つきお よしお

一九四二年生まれ。東京大学工学部卒業。工学博士。名古屋大学教授、東京大学教授、総務省総務審議官などを経て東京大学名誉教授。専門は通信政策、仮想現実。趣味はカヤックとクロスカントリースキー。著書は『縮小文明の展望』『先住民族の叢智』『転換日本』『凛々たる人生』『爽快なる人生』『意志ある人生』など多数。